

## 今月の1冊

## 『ゲームと不登校』

学校復帰へのサインを見逃さないために』

守矢俊一／著

ブックマン社 2023年 1650円（税込）

学生時代から不登校児童生徒や保護者の支援を続ける著者は、NPO法人の理事長を務め、年間120名を超える児童生徒の支援にあたっています。その成果は「不登校支援に人を捧げる著者だから書けた『学校復帰』への近道！」という帯の一文に収斂されています。

そんな経歴・実績から、今の不登校対策への疑念・不安が随所で吐露されます。「文部科学省が『学校に来なくていい』とまで言ってしまったら、義務教育はどうなるのでしょうか。」「嫌なことがあったら無理しないで休んでよい」という文部

科学省のメッセージは、深刻な理由で学校に行けなくなった子どもには大きな救いになる一方、そうではない子ども、なんとなく行きたくなくなった子どもに対しては不登校へのハードルを一気に下げってしまう免罪符となりました。

このような指摘が各所から上がったのでし

よう。文部科学省は令和5年11月17日に発出した通知の前書きで、「これまで発出した通知について、『学校に戻ることを前提としない方針を打ち出した』等の指摘があることから、誤解が生じないように」と釘を刺しました。

閑話休題。著者の「自主性」に関する、次の論述には剋目させられました。「『自主性を重んじる』という言葉は、自主性を身につけさせたい子どもたちに対して、その環境を整えたいうえで、自主性を身につける方法をきちつと教えることによつて確立できるものだと私は考えます」。私の座右の3冊の本のうち2冊に同様の主旨が書かれていたのです。半世紀以上前に出された「生徒指導の手びき」（文部省、1965年）には「自主性」を尊重されながらも「社会化」される生徒像が、國分康孝先生の『学校カウンセリングの基本問題』（誠信書房、1987年）には「自主性というのは既存の事実や観念にふれつくしたところから生じるものである」との記述があります。肝心な点に触れていませんでした。書名にあるとおり、著者はゲームに関する専門家でもあります。ゲームの個性から対策を論じたり、「今すぐWiFiを解約してください！」と提言したりするなど、その博学多識ぶりを見せていますが、何と言つても圧巻は本書最後の一文です。ゲームへの熱中が不登校の大きな原因になっている児童生徒向けなのでしょう。「『日常はゲームよりも快感を得られる』それを彼らに感じさせるために、現実の世界に戻してあげることでは、不登校の子どもを救う道はないのです」とあります。

神田外語大学客員教授 嶋崎政男

